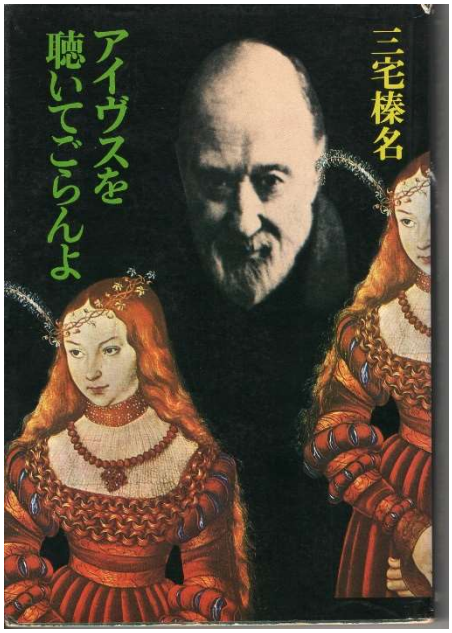
東経大図書館ランチタイム　音楽と本の出会い

第１回　三宅榛名『アイヴスを聴いてごらんよ』：アメリカ近代音楽の父、チャールズ・アイヴズの超入門編



私がチャールズ・アイヴズ Charles Ives という作曲家の名前を知ったのは、三宅榛名のエッセイ集からでした。三宅榛名はジュリアード音楽院で作曲を学んだ才媛で、作家の柴田翔は彼女の夫です。柴田は『されどわれらが日々』で芥川賞を受賞した人ですが、学生さんの世代では、知らない人が多いかもしれません。

三宅榛名の本から、アイヴズが詳しく紹介されているように思われるかもしれませんが、ほとんどのエッセイがアイヴズに言及しておらず、大相撲でいえば「肩透かし」です。今流にいえば、アイヴズ・ウォッシュなのですが、彼女が作曲を勉強した 1970 年代といえば、アメリカでアイヴズが再評価（厳密にいえば再々評価）された時期なので、その雰囲気が、エッセイ集の題名に強く反映しているとみることができます（三宅榛名『アイヴスを聴いてごらんよ』筑摩書房、1977 年）。

アイヴズは、子供のころから元軍楽隊の指導者であった父から音楽の手ほどきを受けていましたが、イェール大学に進学すると、オラシオ・パーカーという音楽教師のもとで本格的な作曲の勉強をします。パーカーのもとで古典の作品を作りましたが、結局のところ、音楽で生計を立てることを断念し、保険会社に就職し、のちに有力保険代理店の役員となった人です。このアイヴズが仕事のオフの時間にもくもくと作曲していたことは、自分を除けば妻のハーモニーぐらいしか知らなかったといわれています。彼の残した音楽は、ヨーロッパの輸入品のような音楽を書いていた当時のアメリカ作曲家のものとは全く異なり、ほんとうに独自なものでした。当時、独自ということの意味は、理解されないという言葉と同義でした。彼の音楽はそれほど先進的かつ実験的だったのです。

アイヴズは、ヨーロッパ音楽の影響を受けた先輩作曲家と比較すれば、はじめてのアメリカ人作曲家というべき人です。彼の後に、ガーシュイン、グローフェ、コープランド、バーンスタインなどアメリカという風土に根付いた本物のアメリカ作曲家が続々と誕生することになるのです。

第 1 回のランチタイムセッション音楽編では、その実験的な性格ゆえに、わかりにくいといわれるアイヴズの音楽に関する超入門編を行いたいと思います。入門に相応しい魅力的な作品をそろえましたので、音楽に興味のある学生さんにはぜひお集まりください。

演奏予定曲目（詳細は当日お知らせします）
アイヴズ「サーカス・バンド」Lukas Foss, Milwaukee SO, [PROARTE; VDC-1057]
アイヴズ「ゼイ・アー・ゼア」Stokowski, American SO, Gregg Smith Singers, [Sony; MPK 46726]

アイヴズの交響曲からいくつかの部分
Ives, Sym. No2, Finale, L. Bernstein, NYPO [Sony; MK42407]
Ives, Sym. No4, Ist Mov. Michael Tilson Thomas, SFSO [SFSmedia; SFS 0076]

アイヴズ「ヴァイオリン・ソナタ」
Ives, Sonata Vn&Pf No4, Finale ROSCO(甲斐史子＆大須賀かおり)　[ALM, ALCD-7248]

アイヴズ、歌曲集から
Ives, Memories, etc. Jan DeGaetani(MS), Gilbert Kalish(Pf), [Nonsuch; 9 71325-2]

アイヴズ自身によるピアノの弾き語り
Ives plays Ives, [CRI; CD810]
アイヴズとクロノス・カルテットの共演
Ives, They are their! Kronos Quartet, [Nonesuch; WPCC-3656]

アイヴズ「ヴァイオリンとピアノのための 4 つのソナタ」演奏 ROSCO（令和 2 年度文化庁芸術祭賞受賞）

注：Ives の日本語表記は、アイヴズがもっとも近い表記だが、三宅は「ズ」と濁音で終わるのを嫌い「ス」とした。三宅以外では、「ズ」の表記を採用する。